

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十二年五月廿日印刷本 昭和十二年六月一日發行

第三卷 第六號

淨土

六月號



法然上人鑽仰會發行



中里介山著

法然上人傳

三六版二五〇頁
九ボラルビ付
美麗クロース装
定價六十錢
(送料六錢)

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から

法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、後二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く歎信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を悩ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると思ひて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の通俗化！

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園十五號地
振替東京八二一八七

◇ 社友の隣 所行發 ◇

腎臟・中風

高血壓の良藥



腎臟藥

二十五絃

經驗によつて推賞す

淨土宗 執事 野上 運外

私はいつも忙しく暮してゐますので、とかく身體を無理に使ふことがあります。嘗て或る會合の席上で『二十五絃』を服用してみたらと奨められるまゝに、早速これをお茶がはりにつゞけてみることにしました。すると段々疲勞を感じることも少くなり身體の調子もよくなるのが意識され、殊に排尿の具合が非常によくなつて、心氣一層明朗に愉快な日月を過ごし得るやうになりました。私どもの知人にもこれを服用して腎臟病や高血壓を快癒した方も少くないやうです。南洋で採れる藥草から調劑されたものださうですが、とにかく健康藥としても大變よいように思ひますので、誠意お奨めするに足るものと思ひます。

藥價

十日——二圓八〇錢

東京市神田區小川町二ノ十

卅日——七圓五〇錢

發賣元

南洋生藥研究所

送料 内地 十五錢
海外 四十二錢

電話神田八一〇番

振替東京三三七〇四番

希望者には『淨土』で
お取扱ひ致します

▼説明書無代進呈！

◇浄土第三卷第六號 六月號 目次◇

・表紙・目次カット……………鈴木金平
・扉……………青柳喜兵衛

論説

念佛の現代的意義

………文士學博士 椎尾辨匡……………(二)

三來夜話

佛縁の導き

………大島徹水……………(四)

聖典講義

人生を開眼する

………大野法道……………(三)

浄土教入信の記

………法學博士 仁保龜松……………(四〇)

隨筆師

………吉水靈家……………(四)

信仰相談

………中村辨康……………(四六)

信仰實話

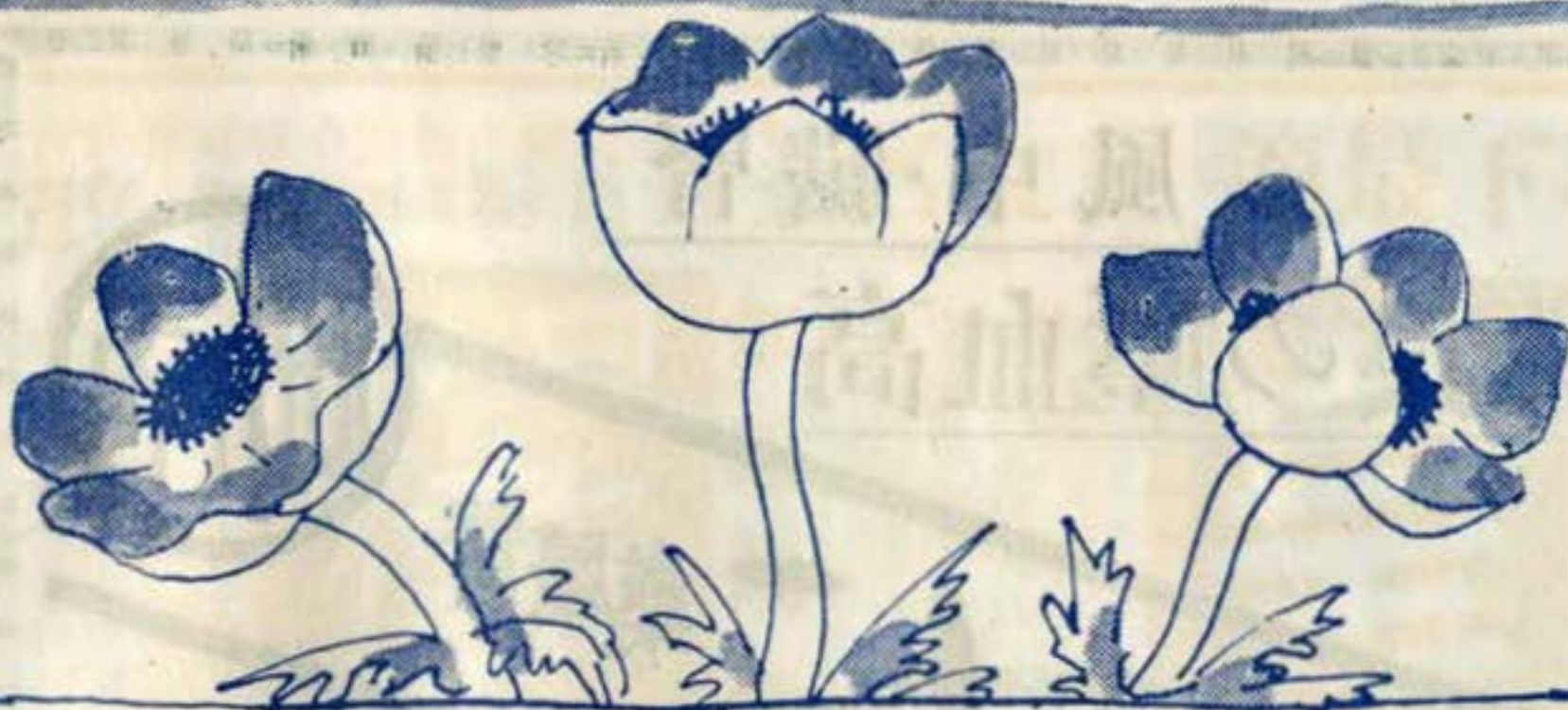
無言の行者の話

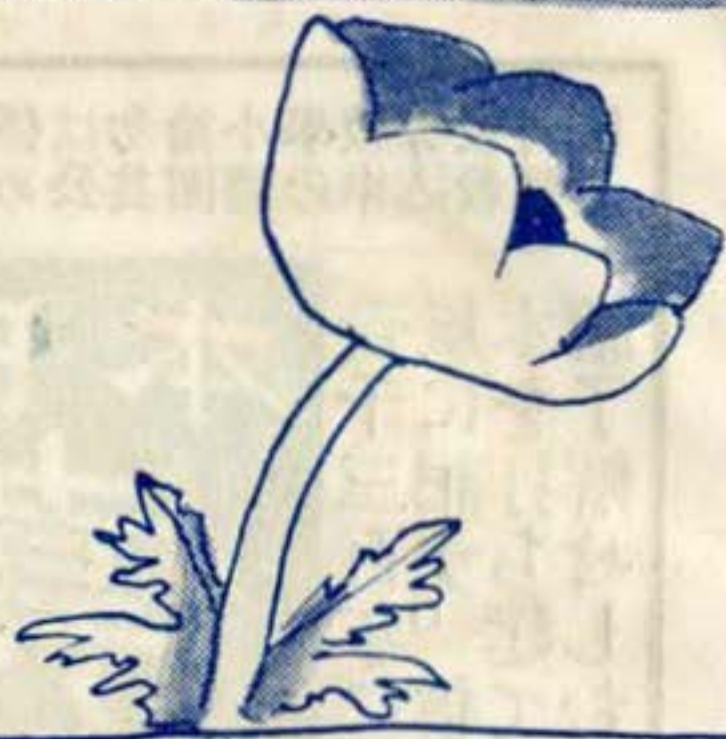
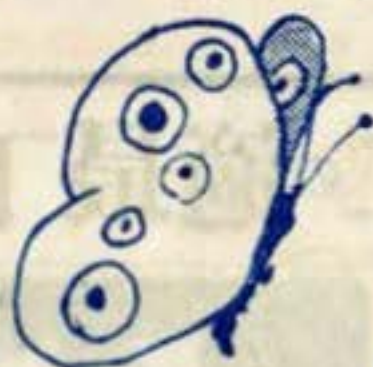
(鈴木金平畫)……………中野善英……………(九)

現代語譯

通俗方丈記

………佐藤春夫……………(一八)





名人談義

久保田投手を語る

本誌記者 (三)

瀬川菊之丞の話

松本幸四郎 (四)

歌壇

與謝野晶子選 (七)

外國笑話 (四)

俳壇

太田耳動子選 (元)

袋中上人 (三)

聖典講義

空家の主人は誰か

中村辨康 (三)

よみものの特輯

小説

住蓮と安樂

(西泉畫) 飯田光明 (二)

讀物

七ツの柱

(野水昌子畫) 江上秀靜 (四)

童話

大福長者

谷中安規 (五)

コント

子はかすがひ

小池光 (四)

鑽仰運動ニュース

編輯後記

(六)

◇ 淨

土

第三卷 第六號

六月號 目次 ◇

…淨土…

六月號

念佛の行は行住座臥をきらはぬ事
なれば、ふして申さんとも、居て
申さんとも、心にまかせ時による
べし。念珠をとり袈裟をかくる事
も、又折により、體にしたがふべ
し。たゞ詮ずる所、威儀はいかに
もあれ、このたびかまへて、往生
せんとおもひて、まことしく念佛
申さんのみぞ大切なる。

法語抄一四八





信仰
事實談

無言の行者

—— 念佛上人の事ども ——

中野 善 英

「人が、念佛を、やめてまで云はんならぬ事が、どれ程ある。そんな口があつたら、其の口で念佛申せ——」

と云つて、念佛上人は、いつもお念佛以外は全くの無言、日に三度の法話の時以外は絶對にお念佛だけであつた。それで人が、いつとはなしに『念佛上人』念佛上人と云ふようになった。勿論、御飯をたべてゐても、御飯一口、念佛一口、お汁を吸つてゐても、お汁一口、念佛一口。寝てゐても寝言のように始終、お念佛の聲がしてゐた。

「ローソクの火を消すのでも、口で吹き消すことはいらぬ。その口で

念佛申せ。いくら手で扇ぎ消すとて、手間取つてゐてもいゝ」

ダブツ／＼だけ。それで御發足の折も、いつもの通り三時から起きて一寸の手洗鉢の水で、顔を洗つたら、もう直ぐ大聲の念佛です。そして、

「お念佛は、朝早くとも、内證で申すものでない。安眠妨害になるところか、徳になる、徳を積ませる」

と云つてゐられた。そして今朝はもう出發といふので帽子も被り、着物の裾も端折つて上紐で結へ、俵の乞食袋も首に一つ、左右の肩から二つ三つも掛けて、實に物々しい装束の儘でお念佛だ。そして屋外が少し薄明りに白んだと思ふと、スツクと立ち上つて、風のように南無阿彌陀佛／＼で迂り出して行つて了はれる。勿論、「サヨナラ」も無ければ「御氣遣よう——」も無い。朝食も御立ちまでに念佛の席へ差上げなければ、食べずのまゝだ。お伴する者も朝食無しで、三里でも四里でも、次の會所までお伴せんならぬ。それだから、若し、

次の處が近いと、これは又夙いお着きだから、先方の家では、まだウツカリして寝てゐる事がある。すると軒下に立つて大聲に、戸の開く



までお念佛だ。戸が開くと物をも云はず飛び込んで、佛前に坐つた切り

廿一歳の折、「一寸學校へ行つて來ます——」と母親に告げた切り、家の暫居に、

「苦は樂の種、樂は苦の種」と書き残したまゝ家を出て、其後八年間は全く消息が絶えた。

此の八年間の事は、ドコでどんな修行をして居られたのか、晩年も進んで自分から一口も語られた事がないから薩張り解らぬが、それでも、時々フィと思はず、其頃の様子らしい話が漏れるのを聞いても、信州、越後、紀州などの山々に居られたらしい。即ち或時の話に、
「山に居た頃、カラダ中に吹出物が一杯出来て困つたが、毎日、大きな樹の叉に股がつて念佛してゐたら、樹がすつかり毒氣を吸ひ取つて、自然に治つた。お蔭は有難いものだ……」
と云つてゐられた。又、

「山に居る頃は、石と石とをカチ／＼打ち合せて念佛申してゐたが、手に響いて一通りの痛さでない。こんな座蒲團の上に坐つて、木魚を叩いて念佛申してゐるなんて、勿體ないぞ」

とも云つてゐられた。こんな事を想合すると其當時の様子がわかる。

そして此の遍歴の果てが、九州鹿兒島に忽然と姿を現された。而し其時は見る 佛 もないボロ／＼の乞食姿で、其後、不斷光院や淨光明寺に十四年間居られた。此間の逸話も多いが、或時は、人力車に乗つて、車夫が上人のお念佛につれて念佛申したからとて、嬉

此の薬師堂に居られた頃から、しきりに屈請する者が殖え、終に初めて西三地方へまで遊化せられるようになった。これが最後の教化時代とも云ふべき十年間で、大正十年、五十七歳より六十六歳入寂（昭和五年十一月廿三日）までである。

「病氣になれば、こげな奴は山へ逃げ込めばいい。そしてソコで野垂死せや、誰にも厄介かけず、養生費なども用意して置く必要がない」として、御布施などは悉く一つに包んで、参詣の座中へ後向きの儘で放つて寄こして、道普請、櫓架け、道標、屋根葺換などをさせられた。松喜庵で臨終せられた後には、五十一錢五匁、財布に残つてゐたそうである。此の一事を以ても全てを捧げて念佛に生きくれた。

十一歳より六十六歳まで五十五年間の念佛求道が、周道上人をして「無言の行者」にしたのである。そして「喋舌つて罪造るより、云はずにゴロで——」

と口稱一行の「念佛上人」「無愁上人」にして了つたのである。

其足跡は、西三、尾東の一圓、村から村の片隅まで、其教を被つた念佛同行、諸處に數限りなく、其の逸話奇行、靈感奇瑞、遺物遺教、記念の道場、記念の行蹟、遺墨遺影等無數あれど、今は割愛して余が近く七年忌を記念して刊行する單行本に譲る。

右足の跡

藝道を語る

瀬川菊之丞の話

松本幸四郎

およそ人間の住んでゐるところには必ず固有の唄と踊りがある。踊りは愉快の感情を發散する人體自然の運動である。隨て昂奮の極度が踊り手自身を忘我無念の境に入らしめねば感興をひかない。どんな野蠻人の間に行はるゝ單調無技巧の踊りにも急調子が出て來るにつれて自然の變化が現はれてくる。多かれ少かれ踊りの手振りに變化の出て來ないものは殆んどないと云つてよい。舞踊體の線に複雑した變化が出れば出るほど自他共に絶妙の興趣に酔ふのである。世界中で複雑した線の變化から生ずる特調をもつたもので日本舞踊の右に出づるものは恐くあるまい。「能」から生れ出た歌舞伎劇も皆な舞踊を中心基礎として組み立てられたものである。

寛政以後、天保弘化に至る間は、いはゆる江戸舞踊の極盛期とも言はるべき時代で、舞踊の堪能者が續々輩出し、窮屈な從

來の内規も除かれた爲めか、急に變化に富む舞踊が歡迎されるやうになつた。七變化、九變化、八景、十二ヶ月等が即ちそれである。

七變化したは古今の立お山（文政時代）

七化ケの所作は歌道の立お山、天保時代

松
二
鳥



通俗方丈記

佐藤春夫述

ほのかに聞き傳へる所によると昔の聖天子様の御代には御政治の中
心點は一般庶民を憐れむと云ふ所にあつた様である。民草達が貧乏の
爲に苦しんでゐる時とか、何かの變事の爲に苦しんでゐる時などは尊
貴の御身であらせられながら御自身のお住ひの皇居の事などは少しも
お構ひなさらずに、軒の端に不揃ひな芽の端が出てゐてもそれさへお
切りにならせられずに、その上に民草が食べるお米のない時には年貢
さへも免除された程なのである。こうした御事は世を平和にお治めな
されたいといふ忝い大御心から出るものであつて有り難いものなので
ある。所が現在の有様はどうであらふか、やれ都の移轉だとか何だか
と云つては人心を平和に治める所か不安のどん底に落し入れてゐる有
様ではないか、もつともこれは清盛が無道の極端な專横の現れなので
あるが、何にせよ昔の聖天子様の御代の事を考へ合せて見ると實に隔
世の感に堪へぬ有様は、眞に嘆かばしい事である。

京の地を踏んでから、彼は五年も前の追憶をくり返してゐた。

あの霜の朝、三條大橋の欄干によつて橋脚に碎けては散る河の流に見入つた一時——、拭ふことの出来ない片戀の遺る瀾なさも、曉の色と共に制し身の無常を感じ、つれない片戀の遺る瀾なさも、曉の色と共に制し得たあの日、その足で彼は六波羅の母の家に歸つたのであつた。そして計らずも父實遍に會つたのである。

「どなた！」

母の朝子は吃となつて、出會頭になちつて行つた。

「この早朝から陣太刀など佩いて、何の御用でござります。何誰さまでござります！」

お、信國、と、無事な吾子の姿を見て、心は嬉しさにさわぐものを、ちつと殺して續けざまに浴せかける佛心鬼語。

「えゝ、もどかしい！ 何誰様ぢやと聞いて居ります。木曾猿のはぐれものらしゆ見えまするが、女一人の住居と見て押しかけてござりましたか」

「母上様！」

「何、妾を母上と呼びなさる？」

信國は土間に崩折れて、べつたりと兩手を支え、止め度なく溢れ落ちる涙

う。朝露のやうなこの身、何時果てようとも計り知れないこの身、然も絶えず群がる雜念に遮られて何時の日にか安心立命することが出来るよう——。

能登なるが故に衆僧の妬を受けることも又彼には堪えられぬことであつた。

實際住蓮の咽喉はあらゆる音聲を自在に、巧に分け流したものである。

聲明が彼に依つて維那せられるとき、一山の僧達はたと恍惚として、暫時は同音することさへ忘れたかに見えた。豪壯な本堂の隅々まで、圓みをおびた重々しい音律が、陽炎のやうに揺らめきわたるのであつた。「寂光の淨土」人々はさう云つてこの瞬間を形容した。

けれど住蓮は淋しかつた。内に満たされるものを感じないのである。毀譽褒貶の俗にとらはれてゐる身、出家の本懐は何時になればとげられ得るか、——涅槃の境地——高邁な教にこの凡夫。住蓮の胸にはかうした惱が絶えなかつた。

それが五年間も續いてゐたのである。

雨は靜に綱代の笠を叩いてゐる。白く煙つてゐた東山の姿は、今はつきりと目前に迫つてゐた。

あゝ五年、無意に過ぎして來た泡のやうな五年、そして今のこの朗らかな氣持よ。

吟み覺

上人の御法談がすんで、善男善女が歸つて行つたあとのひとときである。

何と云ふ楽しい心であらう。ちつと目をつむつて佛殿の眞只中に端坐してゐるのであるが、阿彌陀佛の像がちか／＼と金色に輝いて見えるのである。彼の目頭はうるんでゐる。たゞもう嬉しさに心が浮き浮きと弾んで來、日々聞き慣れた上人の御法談の數々が、浮んで來るのであつた。

——たゞ阿彌陀佛の本願を頼め。機解味劣濁惡の凡夫、戒定慧の三學を以て到底安心立命することは出来ない。空しく煩惱の犬に追はれて忙生の中にすぎよう。朝顔の花にも似たる露の身——。

——一心に専ら彌陀の名號を稱へよ。佛大覺の本旨に叶ふ濁世相應の門は、只專稱彌陀佛の行あるばかりである——。

——たゞ念佛せよ。必ず往生を得。本願と念佛とは一體不離のものである。南無阿彌陀佛と稱ふことのみが、阿彌陀佛に對へ奉る道である——。

——善人は善人ながら、惡人は惡人ながら、たゞ一向に念佛せよ。

佛の光明は遍く十方の世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず——。

次から次へ、上人の御法談が繰り出されてくるのであつた。その度にひし／＼と胸を打たれ、打たれる毎に新たな



の年である。

去年の末つ方からのことである。京の街々は、こんな話で賑はひ初めた。

「念佛衆が鹿ヶ谷にこもつてゐるさうで」

「それがとても正氣の沙汰ではないらしい様子、何處から集めて來たものか、丸太や箆を組立てゝ、どうやら雨露だけはしのいでゐるしらいけれど、人らしい暮しも思へぬさうで……」

「晝夜六時に、籠も哀しくお經文をあげてゐると云ふ話で……」

「それが禮讃とか云ふのださうな」

「とにかく變つた法師に違ひありますまいのう」

誰の口から云ひふらされたともなく、鹿ヶ谷草庵の噂が流れてゐるのであつた。鹿ヶ谷の事實を知つてゐる人々は極めて少なく、街を流れて行く噂は誇張され跋説せられて殆ど狂氣の沙汰にせられて行つた。人が近寄ると怒號するとか、その時の恐ろしい音を語り、この寒空に破れ衣一枚で頭張り通してゐることや、氣狂には寒さも暑さも判らないのであらうなど、哄笑まぎれに語る



人生を開眼する

「四誓偈」講義——「その五」

大野 法 道

(六) かの智慧の眼を開いて

この昏盲の闇を滅し

諸の惡道を閉塞して

善趣の門に通達せしめん

十三 人生を開眼する

第六偈は、人間が我身の愚かさを改めて、智慧の眼を開いてゆく所に佛があることを告げるのである。

考へてみると、人間ほど愚かなものはない。その時はこれによいと思つた事が、後になつてそれが全く、思ひちがひであつたり、たしかに大丈夫な筈が、後になつて、あの時どうして、あんな馬鹿な事をしたやらうと、自分でも解らぬやうなことがある。

ご飯の水加減にしても、調味物の鹽加減にしても、でき上つてみて、方めて水が多過ぎたとか、もう少し減しておけばよかつたとか、本當に判るのである。

り、之を大きく、人の一生について云へば、或る物に眼の昏むおそろしさを減して、人間に生れたかひのあるやうに眼を開くことである。

この心がけのある所、苦しい知覺だけしかない世界としての地獄、不平と怨みで瘦せてゐる餓鬼、弱肉強食で自己本位の畜生など、「諸の惡道」が閉ぢられて、生きがひのある人生、即ち「善趣の門」の扉が開かれるのである。

(七) 功祚満足することを成じて

威曜十方に朗かなり

日月は重暉を戢め

天光も隠れて現ぜず

十四 どこまでも功德を積む佛

第七偈は、佛の自徳が擧げられるのである。

凡そ美はしい喜ばしい、人間のねうちのある行の「功德」が成し遂げられた尊さは、何ものに譬へやうもない。日月の光のやうに出没があつたり、物體のために遮られたりすることなく佛の徳の光は無邊光であり、無礙光であり、無對光である。

更にまた、功德が成し遂げられたといふのは、でき上つてしまつて、それ已上何もせず、止まつてゐるのではない。どこ

までも、功を積み

常に大衆の中に於て
説法獅子吼したまふ

十五 藏から持ちだす寶の數々

第八偈は、再び佛の教化の徳が擧げられるのである。

春には種々の花が咲き出す。前栽の桃や連翹や沈丁花が散る頃、そろそろ歩きに野道をゆけば、足もとに菫や蒲公英の氣の利いた配合が見られるし、あちこちに蓮華草や菜の花の茵が、麥の青疊の中に並べられてゐる。大和心と歌はれる櫻の雲は、遠く近くかすみの裾に連つてゐる。春がもたらすこれらの花の色とり／＼のうるはしさよ。

しかし、花が開き出すのは春に限つたことではない。

東洋蘭にしても、春蘭の外に夏咲く玉花や建蘭があり、ゆく年の名残りを惜む氣骨に富む寒蘭があり、とりわけ秋の素心となると、憎きまでに清爽澄明の氣品を含んで、世の疲れを洗濯するに充分なる風趣がある。

總じて云へば、植物が持つ機能のまゝに、時が來れば、それぞれの花が開くのである。

人間が信仰をもつて、眼を覺まして生きゆくところ、時に應じ、場合に應じて、「廣く」わが身の上にかづくの「功德」の、美はしい花が開くであらう。

それらの徳行は、すべて佛が成就された「法の

